法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

家族における笑いに関する量的調査分析 : 親といっしょにいるとき，どんな大学生が笑う傾向にあるのか

SAITO, Yoshitaka / 斎藤，嘉孝

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
10
(開始ページ / Start Page)
121
(終了ページ / End Page)
127
(発行年 / Year)
2013-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008815

Hosei University Repository

〈研究ノート〉

家族における笑いに関する量的調査分析
―親といっしょにいるとき、どんな大学生が笑う傾向にあるのか―

法政大学キャリアデザイン学部准教授　斎藤　嘉孝

1　はじめに ～ 背景と本稿の目的

家族に関する言説は、しばしば問題を有するものをともなうことが多い。夫婦の不破、親子関係の不仲、DV、児童虐待、熟年離婚など、話題に事欠かない。家族にはもちろん肯定的な側面も存在するが、比較的ショッキングな話題のほうが取りあげられやすいのだろう。また、後述するが、家族に関する実証研究においても、問題や否定的側面を扱うものが多い。家族内ストレスや家族の機能の低下など、多くの研究が対象としてきた。社会における緊急度や、問題解決が志向されることなど、家族を問題点からみる立場は、たしかに重要である。それ自体は否定されるものではないだろう。

しかし、家族のポジティブな側面も、もっと積極的に取りあげられてよいのではないだろうか。例えばその1つとして、家族の構成員がいかにして楽しいときを過ごし、笑うという行為を行っているのかは、重要な側面である。そこで本稿では、笑うことについて家族社会学の立場から分析を行う。現在の日本の若者が、父母といっしょにいるときに笑うことについて、どのような若者（大学生）が笑いやすい傾向にあるのか、2012年に実施した質問紙調査を用いた量的分析によって、検討する。

2．先行研究と本稿の問題設定

これまでの実証研究では、家族のポジティブな側面をみる際、使用変数として、夫婦関係満足度（例：永井　2011；田中　2012）がしばしば扱われてきた。また、子育て満足感（例：力石 2011）、あるいは幸福度（例：赤澤他　2009；岩井 2011）、結婚満足度（例：相良他 2008）なども扱われてきた[1)]。しかし、笑いという要素は、家族を研究するなかで変数としてあまり取りあげられてこなかったといえる。ただし、皆無だったわけでもなく、例えば、乳児や幼児が親といるときに笑う場面において分析した研究は存在する（松本　2012）。いずれにせよ、主になりえるような変数として笑いが扱われてきた研究は、蓄積に乏しい。

もっとも、これは家族領域に限ったことではない。笑いという変数は、学術的にあまり取りあげられていないのが実情であるといわれる。例えば、木村（2010）は、これまで存在した笑いについての研究を丹念に参照しながら、笑いの生じるメカニズムについて整理しているが、笑いを統一的に説明できるような科学的研究に欠けていると指摘している。

そんななか、早川（2001）は、発話において生じる笑いを、質的調査をもとに丹念に分類している。なかでも親しい間柄に生じるタイプの笑いとして、それが談話を促進するものであると論じている。会話の相手と楽しさ・話題・背景などを

Hosei University Repository

共有していることを確認すると、笑いが生じうると分析している。

他のタイプの研究として、笑いは健康によい効果があることを実証したものもある（山田2012）。つまり、笑いを引き起こす要因の分析ではなく、笑いがいかなる影響をもたらしうるかという観点からのものである。

以上いずれにしても、笑いとその要因としての家族関係に焦点をあててその実情を分析するものではない。本稿では、親子関係において生じる笑いとその家族要因に注目する。若者が父母といっしょにいるときに笑うという行為に至るには、どのような要因によって左右されているのか、実証的に検討する。

本稿では、大きくわけて4種類の要因を想定する。親との関係性・親夫婦の様子・家族の様子・パーソナリティがそれである。そのうえで4要因に個々のテーマを設定する。①親との関係性がよいほうが笑いに至りやすいのか、②親とのコミュニケーション頻度が高いほうが笑いに至りやすいのか、③親夫婦や家族をポジティブに評価しているほうが笑いに至りやすいのか、④もともとのパーソナリティが笑いやすさに関係しているのか、といったものである。

さらに性差にも配慮する。男子と女子では①～④のあらわれ方が違うかもしれないし、また同性の親に対してと異性の親に対してでは、笑いに至る要因も異なるかもしれない。以上の点から実証分析をおこないたい。

3．方法・変数

2012年秋、東京近辺に居住する大学生（学部学生）を対象に質問紙調査を実施した[2)]。事前調査が17名に対しておこなわれ、質問文のワーディングなどを修正した。スノーボール法による配布・回収で、有効回答数は416名だった（有効回収率は92.0%）。質問紙の内容は、家族の特徴・家族形態・社会経済的側面や、回答者のパーソナリティ・交友関係などであった。

次に、本稿の分析で用いる変数について記述する。記述統計値については表1のとおりである。

従属変数は「父といて笑う」「母といて笑う」の2つであり、質問紙で4件法の順序尺度によって測定したものを、2件法として扱う。

独立変数は4つの側面から測定する。まず、親との関係性は、「父との肯定的関係性」「母との肯定的関係性」である。それぞれ、6つの項目の得点を足した合計値である。すなわち「父と仲がいい」「父を尊敬している」「父のことが好きだ」「父によくストレスを感じる」「将来、父のようになりたい」「父と一緒にいると落ち着く」という6つである（全て4件法の順序尺度、信頼性係数 α = .878）。母親に対しても同様の合計値を用いる（信頼性係数 α = .841）[3)]。

親とのコミュニケーションは「父との1日の会話時間」「母との1日の会話時間」という比例尺度で測定する。これは1日あたり何分ぐらいかの平均を回答してもらった。

表1　記述統計

変数	平均	標準偏差	範囲
父といて笑う	.76	.429	0-1
母といて笑う	.88	.330	0-1
性別（女子＝1）	.61	.488	0-1
親との関係性			
父との肯定的関係性	16.95	4.070	6-24
母との肯定的関係性	18.49	3.553	6-24
親とのコミュニケーション			
父との会話時間	14.25	22.081	0-120
母との会話時間	36.78	45.216	0-300
親夫婦の様子			
夫婦仲	2.99	.927	1-4
家族の様子			
家族への評価	80.28	17.145	0-100
パーソナリティ			
よく笑う	3.41	.623	1-4
人に合わせられる	2.80	.824	1-4
人といて楽しい	3.31	.632	1-4
楽観的	2.97	.897	1-4
くよくよしない	3.26	.682	1-4

Hosei University Repository

親夫婦の様子は「夫婦仲」という変数として扱う。質問紙で、両親は仲がよいと思うかを4件法の順序尺度でたずねた。また、家族の様子は「家族への評価」という変数として扱う。質問紙では、今の自らの家族に点数をつけるとしたら100点満点で何点かを、比例尺度でたずねた。

パーソナリティについては5つの側面から扱う。「よく笑う」「人に合わせられる」「人といて楽しい」「楽観的」「くよくよしない」であり、全て4件法の順序尺度である。

次節の分析において用いる統計手法は、ロジスティック重回帰分析である。男子と女子それぞれについて、父親そして母親といっしょにいるときに笑うかについて、別々に回帰式を作成し、合計4つの重回帰分析をおこなう。

4．分析結果

ロジスティック重回帰分析の結果は、表2のとおりである。

まず独立変数「父母との肯定的関係性」については、4つの係数が全て統計的に有意だった。つまり、男子は父親と母親ともに有意であり（順に.308***，.314**）、女子も父親と母親ともに有意だった（.248***，.336**）。ここから、どちらの性別であっても、父母に対して肯定的関係性を持っているほうが、いっしょにいるときに笑う傾向にあったといえる。

次に、親とのコミュニケーションに関しては、男子・女子ともに、父親との1日の会話時間が長いほうが、父親といっしょにいるときに笑う傾向にあった（男子.038*、女子.120**）。しかしこれは母親との関係にいえるものではなく、係数は統

表2　「親といて笑う」に関するロジスティック重回帰分析

変数	男子 父といて笑う	男子 母といて笑う	女子 父といて笑う	女子 母といて笑う
親との関係性				
父との肯定的関係性	.308（.084）***	-----	.248（.066）***	-----
母との肯定的関係性	-----	.314（.094）**	-----	.336（.120）**
親とのコミュニケーション				
父との会話時間（1日平均）	.038（.016）*	-----	.120（.037）**	-----
母との会話時間（1日平均）	-----	.016（.014）	-----	.029（.018）
親夫婦の様子				
夫婦仲	.112（.326）	.503（.331）	.168（.277）	-.080（.411）
家族の様子				
家族への評価	.028（.016）+	.039（.018）*	.009（.016）	.012（.020）
パーソナリティ				
よく笑う	1.107（.435）*	1.465（.546）**	-.183（.443）	.947（.659）
人に合わせられる	.380（.283）	.082（.318）	.089（.296）	.219（.470）
人といて楽しい	-.641（.449）	-.605（.534）	-.039（.422）	-.600（.654）
楽観的	-.254（.291）	-.215（.326）	-.087（.284）	.330（.430）
くよくよしない	-.434（.356）	-.495（.425）	.560（.348）	-.820（.658）
定数	-7.594（2.178）***	-9.060（2.634）**	-5.507（1.973）*	-4.457（2.519）+
Nagelkerke R^2	.432	.458	.462	.405

注　***P<.001, **P<.01, * P<.05, +P<.10。カッコ内は標準誤差。

Hosei University Repository

計的に有意でなかった。

親夫婦の様子については、どの係数も有意にならなかった。親夫婦の仲がよかろうと悪かろうと、親といるときに笑うかどうかには関係がないようだった。

家族の様子については、男子のばあいのみ、有意な係数がみられた（.028^{+}，.039*）。男子は家族への評価がよいほうが、父母といっしょのときに笑う傾向にあった。しかし、女子は父母どちらとの関係にも有意でなかった。

パーソナリティについては5つの側面から検証したが、ほとんどの係数が有意にならなかった。唯一、男子が「よく笑う」という傾向性を持つばあい、そうでないばあいよりも、父母といっしょのときに笑う傾向にあった（1.107*，1.465**）。これは母親とのことにもいえた。一方、女子にはパーソナリティに関する変数はどれも有意な係数がみられなかった。

5．考察

本節では、前節でみられた分析結果について考察をおこないたい。

まず、親と肯定的な関係性を持っているほうが、いっしょにいるときに笑う傾向にあった。これは常識的にも判断できることであり、先行研究との関係においても整合性のあるものといえる。例えば、親しい間柄で生じる笑いとして、談話を促進するためのものがあるという議論があるが（早川2001）、たしかに、親子の間には楽しさを共有したり、話題や背景を共有したりすることが多々ありえる。同じ屋根の下で日々すごし、生活を共有してきた親子という存在においては、大学生という年齢になろうともいくつも共通事項が存在しているものだろう。それらを改めて親と確認するとき、彼ら／彼女らは笑うという行為に至るのかもしれない。

また、コミュニケーションをふだんからとっている人ほど、親といるときに笑いやすいこともわかった。ふだんからコミュニケーションをとっていれば、互いのことがわかりやすくなっているだろうし、共通の話題も多くなっているだろう。同じ土壌を持ち、安心して話ができるとすれば、それは笑いにもつながりやすいと考えられる。逆にいえば、ふだんの積み重ねなしに、家族内に突発的な笑いが生じるわけではないことも示唆していよう。

しかしこの傾向は、父親との関係性においてのみみられた。母親とのふだんからの会話時間とは関係がなかった。この結果を解釈するに、母親とはふだんからそれなりに笑う機会を持っていることが考えられる。だからこそ、あえてコミュニケーションの時間の長短が影響を与えにくいのかもしれない。一方、父親とはいっしょに時間をすごすことが少なくなりがちであり、そのため意識的に会話を持たないと、笑うことにつながらないのかもしれない。実際、今回の調査結果からも「1日の会話時間」は母親のほうが長いという結果がでている[4)]。

つぎは、性差の生じた側面について整理したい。男女で違いがみられたところは2点あった。1つは、家族への評価について（「家族に対する点数」）と、もう1つは「よく笑う」というパーソナリティ側面についてだった。これらは男子にのみ有意に関係していた。女子には同じことがいえなかった。

まず家族への評価についてだが、この結果への解釈の第1として、男子は家族を低く評価している場合には、自らの感情をあまり隠さず、不機嫌さを直接示す傾向にあるのかもしれない。そのため男子は家族への評価が低ければ単純に笑うという行為に至りにくい可能性がある。しかし女子の場合は、たとえ家族への評価が低かったとしても、そこで感情を簡単に露呈するより、むしろ感情を隠しながらも、関係性を損なわないようにしようとする可能性がある。男子は、素直な表現を示し、女子はより関係性を重視しているとでもいえるだろうか。

その点に関連して、もう1つの「よく笑う」についてだが、分析の結果、ふだんから笑わない男子は親といっしょにいるときにも笑わない傾向が

Hosei University Repository

でた。逆にいえば、ふだんから笑う男子は、親といっしょのときも笑う傾向にあったということである。一方、女子はそうでなく、親と笑ったり笑わなかったりすることは、ふだんから自身が笑いやすいかどうかに直接の関係はなかった。これらを解釈するに、男子は人との関係性をあまり取り繕おうとしておらず、素直に感情を表現しやすいのかもしれない。一方女子は、例えばふだん他で笑わなくとも親とは笑う関係にあるのかもしれず、家の内外での使い分けをする傾向にあるのかもしれない。

しかし意外にも、他のいくつかのパーソナリティ変数は有意とならなかった。人に合わせられるか、楽観的か、などといったパーソナリティ要素は、必ずしも「笑う」という行為と同一のものではないことを示しているのだろうが、本稿で全て説明することは困難であり、今後の検証が必要な部分である。

最後に本稿による示唆に言及したい。まず男子は、仮に親とあまり笑わなかったとしても、それが単純に彼自身の問題であるなどと即解できるものではない可能性である。男子にとっては他の人間関係との延長であり、また当該家族への評価という根本的な問題とも結びついているようだ。また女子にもいえることだが、ふだんから肯定的な親子関係を築いておくことの意義が確認できたといえる。急に突発的な面白さなどがあったとしても、それが笑いに結びつくかどうかはまた別問題である。とりわけ父親は、子どもとの日常的・意識的な関係性を大切にする必要があろう。会話がふだんからない状態で、急にいっしょに時間をすごして、子どもに笑顔を求めても、それは困難だという、常識的にも十分理解できる当然の知見が実証的エビデンスによって露呈されたといえる。

6．むすび

本稿では、どんな若者たちが親といっしょにいるときに笑う傾向にあるかを主題とし、どのような要素を有する若者が笑いやすく、逆に笑いにくいかを検討した。男女差も部分的にみられ、また対象が父親か母親かによって異なるところもみられた。しかしそんななかで、親と肯定的な関係性を築いていることについては、男女差も父母の差もなく、比較的明確な結果が得られたといえる。通常からの関係性が反映されることは否めないとの結果だった。笑いと家族に関する研究はまだ発展途上にある。本稿も理論的・実証的には試論段階にすぎず、今後もさらなる研究の進展が必要であろう。

注

1）こういった変数が研究上用いられるときは、必ずしもポジティブな側面を見出すためだけが目的ではなかった。こうした変数は、同時にネガティブな面を測ることもできるものであり、例えば、満足度とその要因を量的に探れば、逆にいうと不満足とその要因について検討することにもなる。解釈をどちらで行うかによって、その研究の意味合いが違ってくるという、表裏一体のものである。

2）法政大学キャリアデザイン学部斎藤ゼミナールによる実施。

3）「父にストレスを感じる」「母にストレスを感じる」は逆転項目とした。

4）1日の平均でみると、父親とは男子13.3分、女子14.8分、また母親とは男子23.1分、女子45.6分という差がみられた。

引用文献

赤澤淳子・水上喜美子・小林大祐（2009）「家族システム内のコミュニケーションと家族構成員の主観的幸福感：家族形態及び地域別検討」『仁愛大学研究紀要・人間学部篇』8, pp.1-12.

早川治子（2001）「「笑い」の分類に基づく数量的分析」『文学部紀要』14(2), pp.1-24.

岩井紀子（2011）「JGSS-2000 ～ 2010からみた家族の現状と変化」『家族社会学研究』23(1), pp.30-42.

Hosei University Repository

木村洋二編（2010）『笑いを科学する』新曜社
松本治朗（2012）「9ケ月乳児検診における母親の笑いの感情について」『笑い学研究』19, pp.141-147.
永井暁子（2011）「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『社会福祉』52, pp.123-131.
力石靖子（2011）「中年期初期の母親による子育て満足感と家族との心理的距離の関係 -- 中学生の子どもを持つ母親の円描画における内的家族イメージの検討」『臨床心理学研究』9, pp.105-121.
相良順子・伊藤裕子・池田政子（2008）「夫婦の結婚満足度と家事・育児分担における理想と現実のずれ」『家族心理学研究』22(2), pp.119-128.
田中慶子（2012）「「出会い」とその後の妻の夫婦関係満足度の推移」『家計経済研究』96, pp.58-67.
山田英徳（2012）「微笑みと脳血流について」『笑い学研究』19, pp.86-95.

Hosei University Repository

An empirical study on laughing among family members: What types of undergraduate students tend to laugh with their parents?

SAITO Yoshitaka

The purpose of this study is to examine what types of young people tend to laugh when they are with their parents. A survey was conducted on undergraduate students in 2012. Results of quantitative analyses include (1) that those who have positive attitudes toward their parents are more likely to laugh, (2) that those who communicate with their fathers for longer in daily life are more likely to laugh with their fathers (a pattern not seen as clearly in interaction with their mothers), (3) male students who value their families highly are more likely to laugh, and (4) that male students who are easily laugh always are more likely to laugh with their parents.